

## ニケア信条講話（5）

### 『人間＝神の像』

#### ①. 【人間は神の像と似姿であること。】

聖書を通して私たちに啓示された「人間」とは、

- ・「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。」（創世記1：26）  
（エコーン）
- ・「御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。」（エコーン）  
（コロサイ1：15）

キリストこそ神の完全な《像》であり、そのキリストに《似せて》人間は創造されました。そのキリストから離れたので、《神の似姿》は失われてしまい、《悪魔の似姿》になってしまいました。しかし《神の像》は失われてはいません。《神の像》とは、人間の構造論的なもので、どんなに罪が人を麻痺させても失われないものなのです。しかし《似姿》は恵みであって、失われたり、成長したりします。

洗礼の時、失った《神の似姿》を《胚》の形で聖霊によって受けます。成長するにつれて輝きは増し、背丈も伸び、活気に満ちてきます。しかし、絶えず神に向かって進まず、故意に神に背を向けて、神の命（＝キリスト＝生命の木）から離れて死に向かって行くならば、《神の似姿》の輝きは失われ、靈的に鈍くなって干からび、消滅してしまいます。この死は靈的な死を意味しています。しかし、それでも《神の像》は失われていません。それは《資本金》のようなものであって《神の似姿》を成長させてゆく為に、神によって備えられた賜物・恵みだからです。人間が悔い改めて、再び神に向かって生き始めるならば、聖霊の助けによってそれを成長させることができるのです。ただし、人間の体の衰えと共に、知性は忘れっぽくなり、思考能力は鈍り、精神力や意志は弱くなり、肉体も疲れ安くなり、消耗してきますので、《神の似姿》の成長は遅くなります。やはり神につながり続けること、学び続けること、訓練し続けることが大切でしょう。

画家がモデルを良く見てデッサンをすれば、その絵はモデルに似てきますがモデルから目を離せば自分の想像を描いてしまいます。同様に、人となった神キリストから目を離せば、神に似る事はできません。

《神の像とは》－自由意志・知性・良心・理性・自己応答能力・精神性。  
心と身体全体＝人間。神と交わる力・支配能力。

●「人間という名は心と身体に別々にあてはめられているのではなく、その両者に共に語られるのです。この二つは共に神の像に似せて造られたからです。」

(グレゴリオス・パラマス－14世紀－)

## ②. 【人間は神の直接創造であること。命の息についての考え方。】

- ・「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」(創世記2：7)
- ・「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。」(創世記1：26)

人間の創造については、三位一体なる神が創造の前に互いに相談し合ったかのようです。ダマスコのヨハネはこれを『神の永遠不動の相談』と呼びました。

人間は創られたのは大地に向けられた神の命令によるものではありませんでした。神ご自身がその手ずから大地の塵を用いて人間を形造りました。この神の両手こそ、(神の)言であるイエス・キリストと聖霊であり、神は人間に生命の息を吹き込みました。

●「神の言は新しく創造された地の一片をとって自分の不死の手により私たちの形象を形造り、それに生命を与えました。彼が吹き込んだ霊は見えざる神性の噴出でした。こうして塵と息吹とから不死なる者の似姿として人間が創られたのです。…このように、私は一方で大地の性質をもつ者としてこの地上の生につながっていますが、また他方で神のかたわれとして永世の希望を胸に抱いているのです。」(ナジアンゾスのグレゴリオス－4世紀－)

●「こころは神の息吹であり、天上的なものでありながらも地と混合されたままにされています。それは洞窟に閉じ込められた光です。しかしそれは消えることのない神的な光なのです。」(ナジアンゾスのグレゴリオス－4世紀－)

●「土から取られた者は、この『息』を受け取らなかったのであれば、至と高き方の像とみなされることはありえなかったであろう。」

(アレキサンドリアのキュリロス－4世紀－)

人間は神との一致に達するために、その息吹と共に、『神性の断片』すなわち恩恵をその創造の初めからその心に吹き込まれていました。神が人間を造られた時、体と魂

だけで造ったのではなく、人間をこの神の生命、つまり神の霊へと向かわせました。聖霊が住まわない人間は、出来損ないというのではなく、まだその人が完全な人間本性に従って生きていないということ、人間本性が完全に開花していないということなのです。

●「水中に生きるものであれ、空中に生きるものであれ、それぞれの生命の形に対応した造りになっている。…同様なことが、神の持つあらゆる善を受けるべくして誕生した人間についても言える。…そこで人には、生命、理性、知恵、神にふさわしい善いものがすべて与えられた。それらによって各々の人が、その本来のもの（神）に向かう欲求を持つためであった。」（ニュッサのグレゴリオスー4世紀ー）

人間は、神と一体になるための必要なものがすでに与えられており、神の恵みを受け入れ、受け取る能力が与えられているのです。

魂は神と一体になり生かされ、心は魂によって養われて満足し、満足した心によって身体は生かされるはずでした。しかし神から離れた魂は、身体を道具として、この世の物を貪欲に追い求め、心の平安を得ようとしたのです。

その結果、『肉体』は疲れ果てて浪費されてしまい、絶えず物が無ければ満足しないような、物質の奴隷（偶像崇拜）となってしまい、それでも完全な平安も満足も得られない状態にいるのです。なぜならこの世の物は一時的な物であり、永遠ではなく、移り変わる性質をもち、消え去って行くからです。永遠な平安は、永遠者である方からしか来ません。完全な愛は完全者である方からしか来ないからです。こういうわけで、神と一体にならない限り、人間には完全な平安も安息も静けさも満足も来ないといったのです。

### ③. 【人間が創造された目的とは】

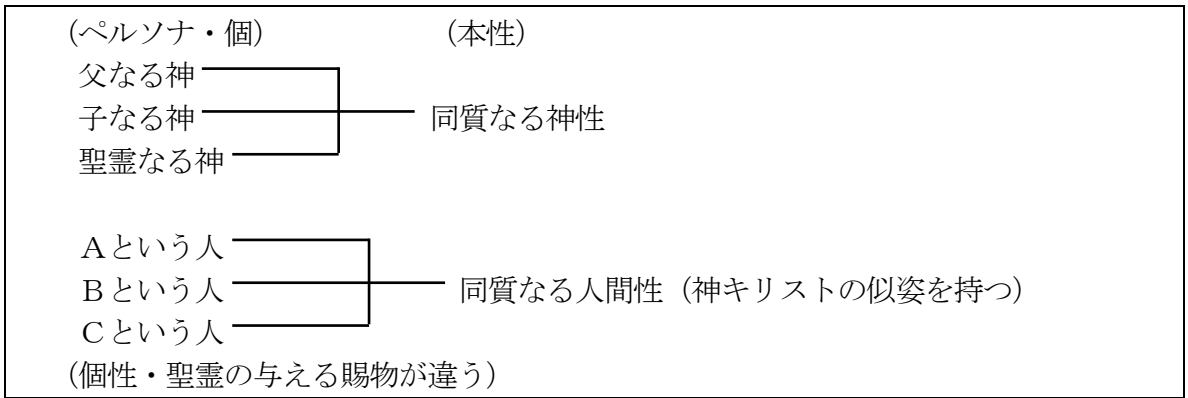
●「神は本性的に全く善そのもの、考えうる限りの善です。あるいは、考え、理解しうる限りの善を超えている、といってもいいでしょう。神が人間を創られたのは、神は善い方であるという以外に理由はありません。神はこのように善であり、その善性のゆえに人間性の形成を企てたのです。」（ニュッサのグレゴリオス）

神は愛です。愛とは自分以外の他者に向かう運動として必ず現れるものです。神は、全被造物を限りあるものとして創造されました。それは自分を越えたところに目的を持ち、絶えず向上して完全である神を求めさせるためでした。又、すべての人間は『幸福』を求めています。人間は鉄が磁石に引かれるように『幸福』に引かれていきます。

もし、この世に完全な幸福があるなら、どうして人間の魂は満たされないのでしょうか。幸福を求める心は死ぬまでなくなりません。それは『完全な幸福』が必ず来世に用意されていることを教えています。私たちは存在しないものを求めることはしないからです。故に創造目的とは、万物が神の至善・至福に与ることにあります。ダマスコのヨハネは「善なる神の内部的充実は、彼の恵みを受け取る宇宙の創造となって現れた」といっています。

#### ④. 【三位一体と人間の本性とペルソナの関係】

人間が三位一体の神の像であるということは、三位一体の神的生命の秩序を人間性のうちに再現することとなるのです。



- 「キリスト教とは神の本性のまねびにほかならない」  
(ニュッサのグレゴリオス)

人間が神から離れた時、神の似姿が失われ、人間本性はコントロールが失われ、無秩序状態になり、自分のためだけに生きるようになった個人は、自分中心になってバラバラになりました。故に、人間性を回復するには、キリストと一体になって失われた似姿を回復し、キリストと同質の人間本性を得て各個人は聖霊によって賜物が生かされ、互いに愛によって一つになる道が備えられたのです。

#### ⑤. 【男女の性について】

- ・ 「復活の時にはめとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ」  
(マタイ 22 : 30)

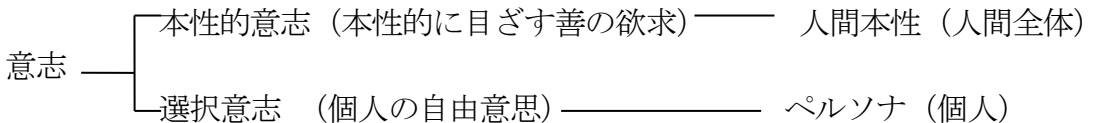
男女という性は、神の像と何の関係もなく、人間の墮落を予知された神によって用意

されたものです。神様には、男の神様、女の神様というものはないからです。もしあったとするなら、男は女ではないことの故に不完全であり女は男ではないことの故に不完全となり、神ではなくなってしまいます。神は常に完全だからです。

結婚とは、男女が一体となる儀式です。神は、男女を、あえて不足する者、限界ある弱い者として創造なさいました。それによって男女が互いに求め合い引き合い一つになるためです。人間が罪によって自己中心になり、分裂し一致できなくなることをあらかじめ見越した神は、一致の手段として男女を創造されたのです。従って、復活の時、人はめとることも嫁ぐこともなく天使のようになります(マタイ22:30)。事実、幼児にはほとんど性の区別がなく、老人になると性の区別がなくなってきます。性はこの世での《働き》のため与えられているものなのです。

## ⑥. 【人間には二つの自由意志があること】

神は一つ的人格的存在（ペルソナ・個）としての人間に語りかけ、人間は神に応答します。人間は神と一体になるように招かれますが、この招きは強制ではありません。それは人間の自由意志に対して呼びかけられるもので、人間は神の意志を受け容れることも、斥けることもできます。人間は善を選択しようが、悪を選択しようが、神の似姿を実現しようが、神と似ても似つかぬ姿になろうが、なお自由を持っています。神の像に創造されているからです。



全ての人間本性は、善を要求しますが、ペルソナ(個人)が善の要求を受け入れたり、拒絶したりします。我々の自由意志は、罪の毒によって麻痺し、歪められ、墮落した自由意志となってしまいました。罪のために暗雲に覆われたように鈍くなり、真の善を知ることもなくしばしば「本性に反する」ことを選び、望んでしまいます。迷うことがすでに病に侵されているしるしなのです。

人間は完全なものとして創造されましたが、それは最初から、目的を遂げていたとか、神と一体であったということではありません。人間が神の恵みを自分の内に取り入れ、浸透させて成長する力、神と交流する力が与えられていたということです。種は、これから出て成長するであろう芽、茎、葉のひな型である胚をそのうちに完全な形もっています。これと同じです。

故に、人間がますます神と交わることができるようになり、神のことが分かり、神からの恵みを自分のものとしていけるようになった時、その人は本来の人間本性の状態に帰って来ているのだという徴になります。